

中学校第2学年国語科学習指導案

1 単元名 書き方の工夫を評価しよう

主教材名 村山 司 「考えるイルカ」 (『新編 新しい国語 2』東京書籍)

補助教材名

「人間は言葉を使う」 渡辺 実 (「人間とチンパンジー 2」昭和58年度 小学校3年上教科書 光村図書)* 一部改作

「チンパンジーと道具」 西田 利貞 (「人間とチンパンジー 1」昭和58年度 小学校3年上教科書 光村図書)* 一部改作

2 単元観

本単元は、文章の内容だけでなく、それを支える書き方にも注目させ、筆者の書き方の工夫を評価させるために設定した。その際、恣意的な評価ではなく、文章の内容や書き方の工夫、筆者の論理の展開の仕方をとらえながら評価させることが必要であると考えた。様々な言語活動を取り入れることにより、文章をしっかりと読み取りながら吟味させることを目指した。

(1) 生徒観

本学級の生徒は、これまでの説明的文章を読む学習の中で、筆者のものの見方・考え方、説明の仕方についての学習を行っている。

「暴れ川を治める」(富山 和子著 東京書籍1年生教科書)では治水に用いられた堤について表にまとめるという学習を行っている。筆者が挙げた2つの堤について違いと共通点を表にまとめた。図表にすることにより文章の内容がより分かりやすくなることを実感するとともに、筆者が文章の中でどのように説明しているかを考える学習となった。

事前に行ったアンケート調査によると、説明的文章は、文学的文章に比べて学習意欲がかなり低いことが分かる。自由読書の傾向も小説に偏っている。印象に残った本を尋ねたところ、説明的文章の題名を挙げた者はいなかった。読むことの学習の中での発表や、感想などを書くことについては、「恥ずかしい」「何を言ったり書いたりしていいのか分からない」「感想を書くのはめんどくさい」という回答があった。

同じく、事前に行った意識調査では、「読むこと」の目的を内容の理解とそれによって「ためになる」ことと考えている実態が分かる。内容について反対意見をもったり、書き方に注目したりすることはほとんどないようである。筆者の意図を考えたり、文章の書き進め方を批判的に読むことを考えた生徒は皆無に等しい。内容理解をゴールとした受容的な読みの姿勢が見て取れる。

読みの技能を計るための実態調査を行った。内容理解や構成の把握が十分にできていると考えられる生徒、副題も含めて文章全体を反映した題名を付けることができた生徒はそれぞれ1/3程度である。内容理解のための十分な手立てが必要である。今回の授業では「論理の展開を吟味」させることを指導目標としている。文章の内容を十分に理解した上で、論理の展開を吟味し、それを実際に生徒自身が文章表現に活かしていくようにさせるという学習の流れも考えられるが、今回は、論理の展開を吟味することによって更に内容理解が図られるような学習の流れを試みたい。

(2) 教材観

本教材は生徒たちにとって親しみがあがり、人気がある動物であるイルカを話題にしている。まず、この話題が生徒の興味を引くと思われる。また、「イルカは賢い」ということが常識であるのに「そ

もそも『賢い』とはどういうことだろう」という常識を覆す問題提起で文章が始まることも生徒の関心を高めるだろう。

その「賢さ」についての論の中で、筆者は「私たちはどうしても自分あるいはヒトというものを基準に考えてしまう」と、ともすれば自分中心の、言うならば傲慢^{ごうまん}とも取れるヒトの判断基準を批判し、「動物には動物の、ヒトにはヒトの生活（生態）に必要な^{ごうまん}があって発達した能力なりシステムなりがある。」と述べる。それぞれの生活（生態）を持ち、命いっぱい^{ごうまん}に生きている生命に対する畏敬の念のようなものを読み取ることができる。このような筆者の考え方は、自分自身について、更には自分を含む人間について新たな視点を開き、イルカを通して動物、ひいては自然についての考えを深める契機となろう。

また、「賢さ」という言葉について考えることも、生活の中で何のためらいもなく、どうかすると無神経に言葉を使っていることへの振り返りにつながる。何気なく使っている言葉の、なんとなくとらえている意味をもう一度考え、とらえ直すという経験をさせることができる。最後の段落では「イルカと話がしたい」という夢について述べられ、イルカの研究にかける筆者の熱い思いが語られる。将来の進路や人生について考える時期である中学校2年生にとって、筆者の生き方は刺激的で魅力的である。

本教材の構成は次のようになっている。

「賢い」とはどういうことか（問題提起）
イルカの「賢さ」を確かめる（実験の準備 実験 考察）
非常に高度な訓練
実験1…「まさにヒトと同じ」結果
実験2…「ヒトでは子どもでも分かるようなことができない」結果
「賢さ」を単純に比べることはできない（結論）

「賢さ」についての問題提起で文章が始まり、この問題を解明するために論が展開される。この中で、実験を行い、その結果を根拠として、筆者の主張がなされていく。実験の準備、実験の経過などを述べた部分では、小さな（一部分の）展開として「まず」「次に」などの接続を表す言葉や「この」などの指示語が的確に配置され、順序よく叙述されている。しかし、ギリシャ文字など見慣れない文字がいくつもあることや、多くの段階があるために文章が長いことなどのために、分かりにくいと感じる生徒は少なくないであろう。また、大きな（文章全体の）展開としては、提起された問題について、実験や準備の過程、実験結果についての考察、そして結論へと導いていく叙述がある。すなわち、頭括法や双括法のように最初から結論を述べることはせず、「もそも『賢い』というのはどういうことだろう」という問題提起から始めて、「イルカは賢い」という一般常識を裏付けるかのように、ヒトと同じような高度な訓練や実験をイルカがやすやすとやっける様子をまず示し、その後に「ヒトなら子どもでもできることができない」と、「イルカの賢さ」を覆すような結果を示すという展開で、読者の興味を引き付けていく。論の根拠を実験に求め、そのような実験結果になる原因を、ヒトと同じ尺度では測れないイルカ独自の生態に求めている。このように論を進めていくという筆者の工夫の仕方を吟味することを目標にし、よい論証の方法を見付けさせる学習に適している。

ただし、「生活（生態）」に結び付ける根拠が、この教材の部分のみでは推定の枠を出ず、論としてはやや強引で危うげな感がある。

本教材は『イルカが知りたい』（講談社）という一冊の本の中から、「賢さ」についての問題提起、三段論法という視点に基づいた実験、本当の「賢さ」とは何か筆者がまとめて述べている部分

など何箇所かを抜き出し、いくつかの変更を加えるなどして繋ぎ直して作成されている。そのため、筆者の書き直しであろうが、つながりとして不自然な箇所がいくつか見受けられる。上記の点のほか、「論理の展開の仕方を吟味する」とき問題となることが予想されるのが次の点である。

ア 「賢さ」の検証のため、なぜ三段論法なのか。原典にはさまざまな実験が紹介されている。だが、本教材では「イルカがどんなふうに物事を考えているか、その論理的な思考方法を探るために『三段論法』に着目した実験をしたことがある。」とあるだけで、多くの実験の中で、なぜ三段論法だけを紹介することが賢さを語る上で有効なのか、その必然性が不明である。

イ 最後の段落になって、「ところで」と筆者の夢が語られる。原典の中では随所にイルカを研究することになったきっかけや研究に対する情熱、イルカに対する愛情がちりばめられているのだが、本教材では、イルカは賢いか質問されて「個人的には『そのとおり。』』と言いたいところである」という言葉が冒頭の部分に見られることを除けば、イルカについての情熱が語られるのは最後の段落のみであり、唐突な感じがする。

ウ 実験の過程にも割愛されている箇所がある。その中でも95ページ16行目の「『もの（文字）』と選ばなければならない『文字』との関係」とある箇所は、実験の前の準備である二つの工程を一言にまとめてしまっていて分かりにくい。

このような点は、生徒が本教材を読んでいく上での気付かぬ障害となるであろう。

本教材の目標は「論理の展開の仕方をとらえて吟味する」であるが、以上のような理由により、「論理の展開の仕方」を本教材のすべての部分でよさのみに注目して学習を行うには、厳密な意味においては無理があると言えるであろう。

一方、このことは、次のようにとらえることもできる。抜粋した部分をつなぎ合わせて作成した教材であるために生じた“破れ目”が本教材を学習する際の抵抗となることが予想されることは前述したとおりである。しかし、この“破れ目”があるという本教材の問題点は、逆に本教材を学習する上での特性となる可能性も含む。“破れ目”に何が欠けているのか想像し、筆者の意図を汲み、言葉を補う。論理の展開が弱いところを補強するには何が必要かを考えるような学習につなげることができる。このような学習を行うことで、筆者の論理の展開の仕方を受容し模倣するのではなく、よいところも欠点も含めての、前述した以上の「吟味」が今後可能になってくる。本文中に根拠を求めながら読み解くことが読みの原則であるが、何を伝えようとしているのか筆者の意図を汲み、不足する部分を補うためには更に深い読みを要求されることになる。生徒の実態によっては、このような批判的な読み方に類するような学習を組み立てることも可能であろう。また、想像を加えながら読むことで、説明的文章を読むことの楽しさを味わわせ、読書指導へとつなげることも可能となろう。

その他に問題点として考えられるのは、語句に対する抵抗である。「推移性」「条件性弁別」「知的尺度」など研究ならではの用語や、ギリシャ文字などの生徒の生活の中にはあまり見かけない語彙が生徒の抵抗となることが予想される。それだけに、こうした論理的表現等を履修させる好機としたい。

(3) 指導観

生徒の実態から明らかになったことを基に、学習過程の前半ではまず、学習意欲を喚起しながら、本文の内容を理解させることに重点を置きたい。文章中の言葉を振り返りながら動作化させ、さらに動作化したことを図にまとめるなどして内容理解を促したい。その際に障害となる漢字や語句に対する抵抗については、語句の辞書的な意味を教材に入るよりも早い時期に調べさせたり、紹介したりするなどして、導入時の抵抗をできるだけ軽減する。

今回の学習では「論理の展開の仕方を吟味」させることが目標である。これにかかわって、第1学年では構成や展開を正確にとらえ、内容を理解することを目指して学習してきた。これから進んで、今回の学習は、「どのように書かれているか」「なぜ(どのような意図で)書かれているのか」につなげるための入門期ということになる。この後3年生で学習する本格的な論説文へとつなげていくために、本教材の存在は大きい。

「論理の展開の吟味」を今回の学習では次のようにとらえる。「論理の展開」とは考えの筋道のことである。本教材では、実験の様子などを順序よく説明している(小さな展開)の部分と、問題提起から始まり、実験結果 推論 その次の実験……というように立論されていく(大きな展開)の筋道の両面を押さえさせたい。また、「吟味」とは、詳しく調べること よさを味わうこと 判断し、評価すること、の3段階でとらえることとする。今回の学習は「吟味」の入門期にとらえ、詳しく調べられることを第1に目指し、はその学習活動が十分に達成できることを目指すのではなく、その視点をもって文章を見ることを初めて経験する機会としたい。

学習する際には、次のことに留意したい。この文章では訓練や実験の間に、筆者の考察が挿入されている。文末の「～と考えられる」「～と思う」や「おそらく」などの推論を表す表現に注目させながら筆者の考えが述べられている箇所と、実験の様子や結果などの事実が述べられている箇所を区別しながら文章の構成をとらえさせたい。そして、構成が違えばどのように文章全体の姿が変化するかを考える体験をさせ、このような文章構成を選び論理を展開していった筆者の意図を探らせていきたい。これによって、更に理解が深まることが期待できる。今回の学習では、学習過程の後半で補助教材を活用し、主教材と比べて読み、共通点と相違点を探ることによって筆者の論理の展開について自分の考えをもつ学習をさせたい。

また、言語事項に関連して、抽象的な語彙を押さえて文章を読んでいくことを学ばせたい。事象や行為の一まとまりと言える文章において語彙、特に読み解く上でのキーワードをしっかりと押さえて読み進めることは重要である。「三段論法」等に触れることは、その抽象的概念を再確認し、語彙を広げる学習の場面となりうる。筆者の語句に対する姿勢も生徒に語感に対する刺激を与えるものである。本教材において抽象的概念を持つ語句についての理解を深め、理解語彙をふやし、3年生で更に広げるためのステップとしたい。また、この抽象的な概念を持つ語句を表現語彙にまで広げる指導も今後必要になってくる。これは、論を展開するための抽象的な思考力を伸ばすことでもある。

3 単元の指導目標

- ・ 筆者の表現意図を考えながら論理の展開の仕方を吟味させる。

4 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	ア 説明的文章を読むことへの意欲をもち、論理の展開の仕方を考えながら文章を読んだり、評価するために読んだりしようとしている。
読む能力	イ 論理の展開の仕方をとらえてその良さを見付けている。 【C 読むこと イ】 * 今回学習する“論理の展開の仕方の良さ”とは、 判断や結論に根拠がある。 考えの筋道に飛躍や無理がない。 ・ 順序よく説明されている。 ・ 根拠から推論、更に結論への筋道に無理がない。

言語についての知識・理解・技能	ウ 抽象的な概念を表す語句について理解し，論理の展開に必要な語句についての考えを深めている。	【言語事項(1) ウ】
-----------------	--	-------------

5 単元計画(全6時間)

時	主な学習活動	教師の指導・支援	評価とその方法
1	イルカについて知っていることを発表する。 これまでの説明的文章の学習を振り返る。 全文を通読し，初読の感想を発表しあい，学習の見通しをもつ。	イルカ，特にその「賢さ」について常識とされていることを発表させる。 今まで学習を振り返らせ，学習の見通しを考える際に参考にさせる。 副題をセンテンスの形で考えさせ，各自の読みを意識させる。(この後何度か検討させ，その変容を意識させる) 初読の感想を発表しあいながら，学習の課題，見通しを考えさせる。	ア 学習の見通しをもち，意欲的に取り組もうとしている。 【ワークシート，観察】 イ 話題をとらえている。 【ノート，発言】
2 (本 時)	訓練，実験の様子について，文章を振り返りながら再現する。 「三段論法」などの論理の展開を吟味していくために重要な語句を理解する。	役割は訓練，実験ごとに交替する。 順序よく説明するために用いられている接続語や指示語に注目させる。 訓練，実験の様子を照らし合わせながら語句の意味を考えさせる。 簡単な短文を考えさせることで，より深い理解を図る。	イ 実験の様子について根拠を求めながら文章を読み，説明している。 【観察，ワークシート】 ウ 抽象的な概念を表す語句を理解している。 【ワークシート，観察】
3	筆者がなぜこのような実験をしたのか考える。 実験の結果はどのような意味をもつのかについて筆者の考えをとらえる。	実験の結果と対応することで考察を読み取るようにさせる。 文末表現等に気を付けながら事実と考察を読み分け，構成をとらえさせる。 実験結果についての考察を，問題提起 結論部分と比べて読み，キーワードを探してまとめさせる。	イ 実験結果と考察を読み分け，実験の意図と実験結果の意味をとらえている。 【ワークシート】
4	補助教材 「人間は言葉を使う」を読み，あらましを考える。 結論部分を補助教材と同じように差し替えることの是非を考える。	主教材と副教材の共通点と相違点を短い言葉でまとめさせる。 筆者が，「人間は言葉を使う」の内容を踏まえて真意を語るという形でまとめさせることによって，論理の展開の違いを明らかにする。	イ 筆者の論理の展開のよいところとその効果を見付けている。 【ワークシート，発言】
5 (6)	違う意見を筆者が述べるとするならば，論理の展開がどう変化するかを考える。 学習のまとめをし，国語学習の三要素を意識する。	補助教材 ~ と主教材を読み比べることによって，筆者の表現を振り返らせる。 幾つかの書き出しを示して自分の考えを書かせる。 説明的文章の読み取りの方法のひとつとしてどのような学習ができたか，国語学習の三要素 めあて(なぜ)，	イ 筆者の論理の展開について，自分の考えをもっている。 【ワークシート】

	内容(何を) 方法(どのように)について振り返らせ、今後の自主学習の進め方を意識させる。
--	--

6 本時の学習指導

(1) 指導目標

実験前の訓練，実験の様子を順序よく説明している表現(小さな論理の展開)をとらえさせる。

(2) 展開(2 / 6時)

過程	学 習 活 動	指 導 と * 評 価
導 入	1 学習課題，学習計画を確認し，学習の見通しをもつ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">実験の様子を再現しよう (「どんな実験なのか分からない」という疑問に答える)</div>	前時に作成した学習計画を確認させることで，本時の学習について見通しをもたせる。
展 開	2 実験に先立つ訓練，実験の様子について，文章を振り返りながら再現する。 3 「三段論法」「推移性」「条件性弁別」などの論理の展開を吟味するために重要な語句を理解し，主教材の論理の展開のよさを考える。	訓練の箇所を再現して見せ，どのような言葉に気を付けながら読み取っていけばよいのかを示す。 どの部分に再現に必要な内容があるか，段落の始めの言葉などに注目させることで考えさせる。 トレーナー役と筆者役に分かれカードを動かしながら実験を再現させることで，接続語などに注意しながら読ませる。 ページ下の図式を参考にさせるとともに，接続語，指示語などに注意させる。 再現した実験の様子を、図式化して確認させるため，ワークシートを準備する。 *イ 実験の様子について根拠を求めながら文章を読み，再現している。 【観察，ワークシート】 実験の様子を図式化したワークシートを使い，訓練，実験の様子及びそれを叙述するための指示語，接続語について確認させる。 訓練，実験の様子を照らし合わせながら，語句の意味を考えさせる。 簡単な短文を考えさせることで，より深い理解を図る。 *ウ 抽象的な概念を表す語句について理解して短文を作っている。【ワークシート，観察】 筆者が「三段論法」について述べている箇所と教科書脚注を参考にさせる。
展 望	4 文章全体の展開の吟味に備え，学習の視点を求める。	実験結果がヒトと比較されている箇所を振り返らせ，“「賢さ」では，イルカはヒトより劣る”ということを書者は伝えたかったのではないかという質問を投げかける。